

さらに肺転移例の予後は極めて不良となっている。

我々は今回、発症時、肺転移を認めた多くの不良な予後因子（年齢：1歳以上，病期：Ⅳ-A，原発部位：副腎，組織型：円形細胞型，尿中 VMA：陰性，血清 LDH，NSE：高値，N-myc 癌遺伝子：増幅，DNA ploidy：Diploidy）を満たす症例に対し，強力な化学療法（厚生省班プロトコール）により，長期（3年10カ月）に CR 生存を得たので報告した。

本症例は多くの不良な予後因子を有しつつ，3年以上の長期生存を得ている稀な症例であるが，今後，いつまで加療すべきか問題が残っている。

2) 当科における CDDP 補助化学療法の検討

大平 敦郎・星名 秀行
鶴巻 浩・本岡 悟
森山万紀子・松田 尚子（新潟大学歯学部）
大橋 靖 口腔外科第二講座

当科では昭和60年4月から化学療法として CDDP を臨床導入している。今回は一次治療後の CDDP 補助化学療法施行例29例について，その臨床効果を中心に報告する。対象症例の性別は男性26例，女性4例で，年齢は19歳から76歳，平均 57.9 歳。原発部位は舌7例，下顎歯肉6例，上顎洞5例，頬粘膜，口底，下顎骨各2例，上顎歯肉，硬口蓋，上顎骨，口峽咽頭，顎下腺各1例。組織型は扁平上皮癌24例，腺様嚢胞癌，腺癌，粘表皮腫，未分化癌，骨肉腫各1例。病期分類はⅠ期2例，Ⅱ期4例，Ⅲ期6例，Ⅳ期14例である。投与方法は CDDP 単独20例，PEP（BLM を含む）との併用6例，5-FU との併用2例，ADR との併用1例で，CDDP を60～100 mg/body を点滴静注した。経過は腫瘍なく生存21例，原発巣死3例，顎部転移死2例，他病死3例で，遠隔転移は皆無であった。5か月から6年5か月の観察期間における累積生存率は3年・72.2%，5年・61.9%であった。

3) 当科における超高齢者口腔癌治療に対する臨床的検討

成田 保之・土川 幸三（日本歯科大学新潟）
加藤 譲治 歯学部口腔外科第二講座

我が国における高齢化に伴い，高齢者の口腔癌患者も増加しているといわれている。特に，80歳以上においては，余命との兼ね合いや，体力的な問題，家族環境の間

題から，積極的な治療を躊躇することが少なからずあることから，80歳以上を超高齢者とし，超高齢口腔癌患者について，治療上の問題点や予後について検討を加えて報告する。対象は1975年から1991年までの12年間に当科を受診した80歳以上の超高齢口腔癌患者一次症例10例とした。その結果，Performance status（以下 P.S とする）としては，3度が1例，1度が9例であった。既往歴，術前検査所見からは，全例に何らかの全身合併症を有していた。平均余命5年以上，P.S 0～2度で，重篤な全身合併症のない症例は4例で，すべて根治的外科切除を施行した。平均余命5年未満，重篤な全身合併症のある症例，あるいは本人・家族の同意が得られなかった症例の2例に対しては姑息的治療態度をとった。

4) 骨肉腫患者に対する Methotrexate 大量療法による NK 細胞活性の増強とリンパ球サブセットの変化

山村倉一郎・堀田 利雄
平田 泰治・守田 哲郎（県立がんセンター）
小林 宏人 新潟病院整形外科
高橋 栄明・井上 善也
堀田 哲夫・大塚 寛
生越 章・今泉 聡（新潟大学整形外科）

【対象】新潟大学および県立がんセンター新潟病院整形外科で加療された骨肉腫6例（年齢12から33才，男5，女1）12クールを対象とした。

【方法】MTX は体表面積あたり6から12gを5から6時間で点滴静注し，Leucovorin はMTX 投与開始後24時間から15mgを3から6時間毎に計17回投与した。NK 細胞活性は⁵¹Cr 遊離法，リンパ球サブセットは two color 解析法によりMTX 投与前日と投与後7日目に計測した。使用した蛍光標識モノクローナル抗体とその組合せは，(1) CD16×CD56 (2) CD16×CD57 (3) CD4×CD8 (4) CD8×CD11 (5) CD8×HLA-DR (6) CD3×TCR δ -1 の6種類とした。

【結果】NK 細胞活性はMTX 投与前22.7±8.7%と全体に低値を示した。投与後は43.9±16.2%と有意な上昇を認め（p<0.01），3回の計測で投与前の3倍以上に増強していた。リンパ球サブセットは，NK 細胞のうち non T-NK 細胞とされる CD16⁺CD56⁺ 細胞がMTX 投与前後で軽度の増加傾向を示した。